

政策づくりを担うのは誰か

関西学院大学法学部 教授 原田 賢一郎

この2年あまり、大学で法学部や経済学部の学生たちを相手に公共政策に関する授業を担当してきた。その中で、それらの政策は彼らが社会人になれば自分たちも負担することになる税や社会保険料を財源にして実施されるのだから、マスコミ報道などを通じてその動向に関心をもつとともに、国政や地方の選挙にも積極的に投票に行くよう伝えてきたつもりである。けれども、政策問題の発見と定義、政策案の設計、政策の決定、実施、評価といった政策過程の各段階を担う主体として、授業では政治家や中央省庁・地方自治体の職員を中心に取り上げざるを得ないためか、公共政策についてはどこか遠く離れた世界のこのように感じている学生が多いように見受けられ、もどかしさを感じていた。

そうした中、手に取ったのが『政策起業家—「普通のあなた」が社会のルールを変える方法』(ちくま新書)(駒崎弘樹/著、筑摩書房、968円)である。本書の著者はNPO法人の経営者、いわば「社会起業家」として、目の前の困っている人々を助けるため、保育所や病児保育、障害児保育、特別養子縁組支援などの児童福祉に携わってきた人物である。それだけでなく、

目の前の人たちをその場で助けられても、困っている人はたくさんいて、自分たちの力だけでは足りなかったり、そもそも困っている人たちが生まれる社会的な構造があったりすることから、困っている人を助ける事業者を増やすために法律を変えたり、困っている人を

生み出す原因となっていた既存の法律を変えたりしてもらうことをしてきた人物でもあり、わが国における「政策起業家」の一人といえる。

そうした著者が、「若者が減って高齢者が増えて経済と財政が立ちゆかなくなって、どんどん貧しくなっていく上に地球規模で気候危機になって災害がひどくなって更に貧しく苦しくなっていくという未来。こうした未来を、子どもたちの世代にあなたは残したいだろうか」「もはや『偉い人たち』に政治と政策を任せ、自分は日々の持ち場で真面目に頑張ろう、ということでは足りないのだ。我々もまた、政治や政策を担う主体として参画し、当事者として日本を少しでもよりマシな国にするために知恵を出し、手を動かさないといけないのだ」という問題意識のもと、自らの悪戦苦闘の軌跡とそこから得られた知見を伝えることにより、普通の人々の中から政策起業家を育てるべく執筆したのが本書である。小規模認可保育所の制度化、医療的ケア児支援法の制定、児童扶養手当の第二子以降の支給額引上げ、男性の産休制度創設・男性への育休制度周知の企業への義務付け、待機児童解消のための保育士の処遇改善、こども宅食の政策化など、本書の表現を借りれば「涙が出るような悲しい課題に対し、笑ってしまうほどドタバタと、驚くような政治行政の仕組みの中、小さな個人が大きな変化を生み出せる奇跡の軌跡の話」がこの中には綴られている。

このコーナーの読者の皆さんの多くは地方自治関係者として、このような政策起業家と個別の案件に関して対峙することがあるかもしれない。しかしながら、先に述べたような著者の問題意識は多くの人々が共有できるのではないか。



『政策起業家—「普通のあなた」が社会のルールを変える方法』
駒崎弘樹/著 筑摩書房